
別の世界で生きていく条件

招きダンボー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別の世界で生きていく条件

【Nコード】

N7141Z

【作者名】

招きダンボー

【あらすじ】

ある日、紳士な男が流行のVRMMORPGをプレイしていた。ダンジョンを進む男が迷い込んだのは異世界なんだそう。

元の世界は諦めて、ここでの生活を決意する男。

彼の明日はどっちへ向かうのか。

処女作です。文章の練習も兼ねているので、稚拙な表現もあるかもしれませんが

プロローグ 冒険の条件（前書き）

初投稿です。

表現など、指摘があればドシドシお願いします。

オンラインの名前、それと一部修正しました。

プロローグ 冒険の条件

本日は快晴。

太陽の日を反射する草原と、そこに立つ一本の雄大な巨木には見る者全てを包み込むような暖かさがある。

その木の下、3人の人物が武器やアイテムのチェックを行っていた。見る人が見れば驚くであろう。その装備は玄人なら一度は見たことがあるようなレアな物ばかり。持ち主のレベルの高さが伺える。

ちなみにこの3人のレベルは999、まだこのゲームでは人数の少ない、カウンターストップに達したプレイヤー達だ。

「じゃあローションさん紳士さん、そろそろ出発しようと思うのですが……」

そう提案したのは全身白銀の鎧に包まれ、金の長髪を後ろで一まとめにした細身のエルフ。

残念ながら男だ。

そんな彼はエルフの中でも中々に整っている部類だろう。

威風堂々としたその姿は、国王や教会に仕える聖騎士の様だ。

しかし悲しいことに、ここはバーチャルの世界。

キャラメイキングによりキャラクターの容姿は自由に弄れる。

ゲーム内のキャラの容姿と、中の人の容姿が必ずしも一致するとは限らないのである。

「ああ、私は問題ありませんよ」

間延びした口調で答えたのは、ローションと呼ばれた男。外見は言わずもがな液体である。

種族はスライムだそうだ。その姿は先ほどから1秒たりとも同じ形を保っていない。

というか、水が形を作っているだけにしか見えない。プルプルしている。

「え！？ちょ、もうちょっと待ってください！」

おおげさなりアクシヨをとったのは、紳士と呼ばれた細身の男。

白いのつぺりとした笑顔の仮面を被り、素顔は分からない。グレーのストライプのスーツに、ネクタイをしている。

黒髪の人族だ。

「あー、これはいけない。こいつはアイテムボックス……うわっ！銀狼の肉が腐ってやがる！」

仮面を付けた男が肉を捨てる光景は非常に奇妙なものがある。

「ふう………。もう大丈夫です、スラッパーさん」

それから5分後、ジップの紳士が黒のロングコートスーツの上に羽織り、聖騎士改めスラッパーへと声をかける。

「よし、それじゃ呼びますね」

紳士は懐から笛を取り出し、ピーツと吹く。

笛の音を合図に、風向きが変わった。

バサバサツと風を切る音がする。

ゴオオオオオオオツ

耳に痛い音だ。飛行機のそれより遙かに大きな音と共に、1頭のドラゴンが彼ら3人の頭上を旋回していく。

『行き先を、我が主』

ドラゴンが問う。頭に直接響いてくるその声には、ドラゴンたる存在の確かな存在感があった。

「ヴァルハラ」

竜の主であるジップの紳士は、明るく行き先を告げた。

VRMMORPG

脳に直接映像を働きかせ、まるで本当にキャラクターの体を動かすことが出来るかのようにした、まったく新しいタイプのゲームだ。

その技術の開発と進化は素晴らしいものであり、最初は映像だけだったものが発売から数年でついに五感の再現までに至った。

当然、ゲームをするために必要な専用機器等は非常に高価であったが、ゲームだけでなく海外の医療機関や軍の人間にも興味を持たれ、裏からの資金援助を受けて開発は進んだ。

発売当初の4分の1以下になった上に、五感も再現されたゲームは爆発的に人気となった。

もちろん人数が増える分、トラブルも増えたわけだが……………。

そして現在、数を増やしてきたVRゲームでも特に人気なのがこの『ヴェルトオンライン』である。

『ヴェルトオンライン』の人気の理由は様々で、モンスター討伐によるレベル上げや冒険者、盗賊、傭兵等々ギルドの所属先は基本とし、

職で鍛冶や商人、料理人となり店を経営したり、はたまた貴族や王国に使える聖騎士団ロイヤルナイツで依頼を受け、働くことができたりする。

レベルの上限を迎えてSTRやAGIを上げることが出来なくなっても、スキルと呼ばれる個人の技の値の上昇もある。

簡単に言うと、STRの上限で攻撃力が上がらなくても、スキルである回し蹴りを発動し続ければ、回し蹴りの威力が上昇して行く、ということだ。

スキルは3つまでしか覚えられないが、それでも十分すぎる性能を誇る。

さらに、プレイヤーがキャラクターを動かすという操作性により、単純なレベル差での力の差は付きにくくなった。

例えばレベルが相手より上でも、スキルの差と単純な反射神経の違いで、戦いの流れが大きく変わるからである。

そして、そんなモンスターの討伐などせず、街や安全な湖で釣りをするもよしトランプや将棋をしてもよし。

一日中カジノでギャンブルも出来るし、現実では高い酒の味も安価

に疑似体験出来る。

そのような特徴から、若者だけでなく老人や中年の大人にも大人気となったのである。

いや、むしろ老人といった高齢者のほうが多いかもしれない。

一度紳士が「なぜこのゲームを始めたんですか」と齡95のおじいちゃんプレイヤーに話しかけたところ、

「若い頃みたいなきぎが出来るからに決まっとるからじゃろうが！」

と目を見開き、見た目ネコミミメイドのロリっ娘獣人さんに叫ばれたのはジップの紳士の記憶に新しい。

もう寝たきりの老人が再び動ける体験を出来るというのは、やはり素晴らしい技術なのだろう。

のんびり遊び、酒を飲むだけでも良し。モンスターを狩るガチのプレイもよし。

それが売れる理由だ。

プロローグ 冒険の条件（後書き）

がんばるよー

第1話 迷った時の生存の条件（前書き）

1話目です

第1話 迷った時の生存の条件

「うっひょおおおおおおおお」

紳士が叫び声を上げる。

しかし恐怖などは一切その声音からは感じられない。純粋な感動だ。

ただいま高度100メートル。

ドラゴンの背に乗り、街や城、広大な草原や山を幾多も通り越し、向かうはヴァルハラ。

現在のグロリアオンラインにおける最難関のダンジョンである。

グロリアオンラインは攻略ダンジョンも非常に多い。

発売から5年経った今も、グロリアオンライン全てのマップの70%程度と言われている。

そのため、まだ未開拓の街も多い。

もちろん、そのポリウムに投げ出そうとするものは少ない。

むしろ攻略しようとするプレイヤーの方が多く、他社のゲームが売れず大変なことになっているらしい。

「いやあ紳士さん、空を飛ぶ度にはあなたには感謝していますよ。ドラゴンなんてあなたと出会わないと一生乗れなかったでしょうし」

ニコニコとスラッパは話しかける。

彼の所属するギルドのメンバーなら非常に驚いていただろう。
なにしろあのスラッパーが笑っているのだから。

「いやアまつたくです。私からも紳士くんには感謝しなければ」

続くはローション。

触手が伸びてスラッパーの背にしがみついている。

「あはは、照れますよ〜」

当の紳士は頭をかいて気恥ずかしそうだ。

仮面で表情はわからないが非常に恥ずかしそうだ。

2人が感謝する理由は簡単だ、ドラゴンという種族は総じてレベル
が高いため捕獲が難しい。

さらに言うと、捕獲の手順がドラゴンの個体によってまったく違う
ものになったりするという点がある。

トップギルドでも3頭所有していればいい方なのだが、紳士の所有
数は5頭。

それも彼は個人でだ。

何を食べているのかどころか、活動時間帯すらわかっていないドラ
ゴンの巢に単身忍び込み、なぜか成体と仲良くなり、

ドラゴンの幼体を持ち帰って育てたという逸話まである正真正銘の
ドラゴンマニア(?)だ。

その功績により、ヴェルトオンライン最大手ギルドのワンニャン動

物愛護団体連合から

「爬虫類ギルド長としてうちに来てくれ！」とまで言われた事もある……らしい。

そして未だに恥ずかしそうにしている紳士をよそに、ローシオンはスラッパへと話しかける。

「そっぴゃ今日はギルドの活動はお休みでエ？」

「いえ、ギルドの活動は部下に任せました。私もどうやら一人のほうに気が楽みたいで……」

「大変ですねエ、いつそのことギルドンなんて辞めてソロで活動すればいいじゃないですかア」

「確かに私も皆さんのようにソロで活動して好きな時間にこうして集まって狩りに行きたいんですけどね……」

スラッパは困り顔だ。

「まア事情があるなら仕方ないですねエ」

残念そうにローシオンが呟く。

「あつ！皆さん『ヴァルハラ』ですよ！」

先頭に座る紳士から声が上がった。

彼が指を差す先には森林があり、

その遙か奥には薄っすらとであるが、宮殿のようなものが見える。

残念ながらドラゴンの旅はここでお終いとなる。

全てのダンジョン、特に外のような天井が存在しないダンジョンには使役獣に乗って空からショートカットされないように、不可視の魔法による防御魔法『サンクチュアリ』が張られている。

空からの侵入は不可能だ。

「じゃあなー！俺は必ず生きて帰ってくるから待ってるよー！」

今夜は焼肉を食わせてやるぞーと、紳士は飛び立つドラゴンに叫ぶ。焼肉という単語に心なしかドラゴンも嬉しそうだ。

そんな彼の姿を眺めて

「では、行きますか」

スラッパは楽しそうに言った。

森林の中は思ったほどではないが、サクサクと進んでいった。

「いいですねえ、上級者の方とのプレイは。こんなにサクサク進むなんて」

自分の身長の2倍はあるだろう長大な槍を片手に持ち、キングゴブリンを突き刺しながらスラッパが呟いた。

「だったらうちの『野良犬集会所』に来てくださいよオ、情報増えますよオ、もちろんソロ限定ですがア」

ローションが魔法を放つ。シュトラールと呼ばれる上級魔法だ。極太のレーザーがワイバーンの群れを次々と打ち落とす。

「はっはー！今宵は我が刀の錆びとなれー！」

紳士は自分の背ほどの巨大な大太刀を振り回す。通常の大太刀より長い分、大太刀全体も太くなっており、攻撃力も高い。キングオークがまるで紙のように切り裂かれていく。

本来、大太刀は殴るものであって、斬るものではないのだが……。

鎧袖一触の四文字熟語を体現したその動きは、味方にはさぞ心強いだろう。

しかし順調とはいえまだ序盤、最難関のダンジョンだ。

3人とも口調は軽いが気は抜いていない。

その異変が起きたのは、3人が湖で休憩していたときだった。

公式によると、日本の琵琶湖をモチーフに作成されたらしい。

その湖は素晴らしい眺めだった。

「あーやつと半分かー……………」

紳士はそう言い、石に腰をかけて湖で顔を洗う。

体力ゲージの安全マージンはまだまだたつぷりとある。

「流石現状最難関ですかねエ、見てくださいこのアイテム、10万ゴールドはありますよオ」

と言いつつも、貴重そうなアイテムが宙に浮いているだけでローシヨンの姿は見当たらない。

本人曰く湖で背泳ぎしているらしい。
まったくわからない。

「ん、そついやスラッパーさんどこですかね？」

ふと紳士はあの綺麗な鎧を着たエルフがいつの間にかいなくなっていることに気がついた。

「そついやアどこでしょうかねエ」

湖からローシヨンがそう答えるが、そのローシヨンも湖に同化してどこにいるか分からない。

もう湖がローシヨンだと考えた方がいいかもしれない。

「んー、どこだろ。コールしてみるか」

ローシヨンを見つけることは諦め、紳士は宙に青いウィンドウを開

く。
もちろんプライベートの情報もあるので、他人からは見えないうつ
になっている。

「ん、どういうことだ？」

紳士は違和感を感じた。

幾度となくウィンドウを開いたことがあるが、
紳士の記憶では今まで一度たりともウィンドウにバグはなかった。

「フレンドの項目が………無い？」

そう。フレンドという欄がまるごと消えていた。

さらに付け加えるなら、GMコールも、ログアウトを選択するボタ
ンも無い。

そんなの最初からありませんよと言わんばかりに消えている。

「あのローションさん、ちょっと困ったことが………」

ウィンドウを閉じて、湖に目を向けようとした彼にとんでもない光
景が飛び込んできた。

「おいおいおいなんだよこれ………」

混乱は最高潮に達した。

紳士は立ち上がり、叫んだ。

「なんで湖が消えてんだよ!！」

先ほどまで目の前にあったはずの湖。

しかし、彼の目の前には深い木々が広がっているだけだった。

第1話 迷った時の生存の条件（後書き）

異世界突入だよー

第2話 初戦闘に勝利する条件（前書き）

そういえばグロリアオンラインって名前が被っている気がするんですが

気のせいですかね？

一部修正 物語に影響は無いです

第2話 初戦闘に勝利する条件

「いやまて落ち着け……ログアウトは、出来ないな。GMコールもなし。フレンドに連絡も出来ないし、ウィンドウ画面からはダンジョン攻略の中止も選択出来なかった……………」

仮面の下、彼はブツブツと呟く。今は一人なので、2人が居た時の丁寧語は無くなっている。

「いやもうこれは諦めて進むしかないな。あの宮殿まで行けばなんとかなるだろ。そしてエルセに迎えにきてもらおう」

エルセとは、先ほどここまで送ってくれたドラゴンのこと。

ダンジョンを攻略すると、転送陣よる街までの帰還と、ダンジョンをクリアしたプレイヤー限定でサンクチュアリの解除がされる。

これにより、使役獣による帰還も可能になるのだ。

ちなみに、転送陣はバグが多く、たまに空に投げ出されて死んだりする。

運営も対策しているらしいが、一向に直ることが無いので『ゲロリアオンライン』をプレイする

中級者以上のプレイヤーは、ダンジョン攻略後に使役獣を使って帰るのが常識である。

「あーくそつ、こいつはまいった。カンストプレイヤーの俺でもこれは無理な気がする」

サクサクと進んで行く。未攻略ダンジョンなのでマップは無い。

「それにしても、『察知』は本当に頼りになるなあ」

『察知』とはキャラ1体に1つしか付かない固有の能力である。一般にエクストラスキルという。

この能力で視界の左上に方角が移り、なんとなく行き先が分かる。

「課金アイテムで強化しまくってて良かった……。運営は俺も糞だと思うけど」

一時期、金儲けに走った運営がPPの販売をした。

これは、レベルアップ時に貰えるポイントで、ステータス強化が出来るというものだ。

内輪もめらしいが、詳しいことは分からない。別グループに発覚し、発売開始より発売禁止になるまでの1時間で彼はここぞとばかりに買い漁った。

そのおかげで、彼は器用貧乏で不人気な人族にもかかわらず、他の種族に勝るステータスを手に入れた。

通常のプレイでは不可能な、STR、VIT、AGI、INT、L
UK全ての能力値のカンストが出来たのは、そのおかげだ。

値段と販売時間のせいかな、買った人間は非常に少なかったが。

パッチによる修正が来なかったのは、彼らがとても良い金づるだったからだろうか

いずれにせよ、そういうプレイヤーはチートスレスレの人間として侮蔑されていた。

彼もそんな一人である。

「ひい！？ってなんだシルクラピッドか……」

尻餅をつく。

ウサギにそっくりのモンスターは紳士を一瞥すると、即座に彼を格上と判断。

そそくさと走り去っていった。

それもそのはず、レベルは300ほどあるシルクラピッドだが、彼の前には小動物同然だ。

しかし、その格下相手に腰を抜かした彼を見て失望してはならない。

最強ソロプレイヤーランキングトップ10に名を連ねるベテランのジップの紳士とは言え

フレンドが消える、ログアウトできない等々の不測の事態が重なったのだ。

怖いものは怖い。

「森が深くなってきたな……。快晴のはずなのに陽がまったく入ってこないぞ……」

『察知』で暗い森でも視界は確保できるが、これでは夜と変わらな
い。

「よしよし、あと5キロってところか。この調子なら……ってレッ
ドタイガー!？」

『察知』の能力の1つに、範囲内の目標の場所を知ることが出来る
と言つものがある。

そういえば縛りプレイと調子に乗って、生き物は『察知』に引つか
からないようにしていた。

確かレッドタイガーは、彼の記憶によると最低でもレベルは700
はあるはずだ。

紳士がレベル999とはいえ、目の前にはどう見ても100匹は居る。

「や、やばい……これはヤバイ」

1匹1匹が大型バスほどのレッドタイガーが、こちらを睨む光景は
なかなか怖い。

紳士の直感が告げる。これは勝てない。
だ

が、それは戦闘が始まったときの話だ。
まだ何か手は残っているはず。

(いや、まだまだ！諦めるな！会話によるコミュニケーションは世界
平和への第一歩なんだ！)

意を決したように紳士は一步踏み出した。

「い、いやあくどうもすいません。こちらはヴァルハラへ続く道で
すよねえ！」

「グルルル」

「あ、そうなんですか！ありがとうございます！」

「グルルル」

「え、そこのお店閉まっちゃったんですか！？お互い不景気で大変
ですね！」

「グルルルル」

「しかし素晴らしい毛並みですね！まるでシルクのような肌触り！
とても野生とは思えない！どんな手入れしてるんですか！？」

「グルルルウ」

「おっと時間だ！それでは私はこれで……なんちゃって……とはいかない……そうですか………」

いつの間にか虎の群れに囲まれ、逃げ道は無し。

覚悟を決めて彼は腰に手をかけ、大太刀よりさらに厚みのある巨大な刀を抜く。

「うおおおおおおお！！」

紳士が真っ直ぐに突撃した。

突進の威力をそのままに、大太刀を目の前の虎の口の中に突き刺す。

「グルルオオオオオオ！」

虎も踏ん張り、紳士の突進を止めるが、すでに息は絶えそうだが、虎も負けてはいない。

自分の傷など意に介さず、紳士の頭を粉々にしようと強大な前足を振りかぶる。が、

「らあー！！」

掛け声と共に紳士は口に刺さった大太刀を、そのまま虎の口の中か

ら頭へと振りぬく。
頭を潰された虎は、血を空高く噴出し、そのまま絶命した。

一撃で同胞が仕留められたことに、周りの虎は一瞬怯えを見せる。
しかし、それ以上に驚いたのは紳士であった。

(血？血だと!?)

『グランドワールド』の世界は子供のプレイヤーも居る。血を噴出すようなグロテスクな演出は無いはずだ。

その紳士の驚きによる硬直を、虎たちは見逃さなかった。

1匹の虎が前足で紳士の頭頂部を強打する。

「ぐう！」

声を満足に上げることも出来ない。

紳士は体を大きく回転させながら、近くの木へと叩きつけられた。

「いつてえ……………上等だア!!！」

その頭部への一撃で頭冷静なものに切り替える。

今はこいつらと戦い、生き残らなければならない。

紳士は虎の群れへと跳躍した。

それから十数分後。

そこには20を超えるレッドタイガーの死体が転がっていた。

紳士の目の前には残り1匹の虎のみ。

虎はすでに相手が格上と理解している。

しかし、虎も散っていった仲間のためにも逃げるわけにはいかないのだらう。

隙を見せれば一瞬で喉元に噛み付いてきそうだ。

だが、紳士はすでに虎のことなど考えてはいなかった。

「どづいつことだ？」

紳士は先ほどの戦闘を思い返し、考える。

(こいつら……前のダンジョンで戦った時より明らかに弱くなっている……?)

紳士がレッドタイガーと戦うのは今回で6回目だが、そのどれよりも今回のレッドタイガーは弱い。

(それに、なんでHPゲージは表示されていないんだ?)

敵はおろか自分のHPゲージさえ見ることが出来なくなっている。

(なぜこいつらは血が出ている?)

倒した敵が、光のエフェクトに変わり、消えたりなどしない。死体がそのまま残っている。

「これは一体、どういうことなんだよ!!」

「グルオオオオオアアア!!」

大太刀の袈裟斬りで虎は切り裂かれる。

その渾身の一撃は虎だけに留まらない。

その一振りの余波は、虎のはるか後方の大木を真っ二つにした。

「ハアハア、ハッああああああ!!」

地面に尻餅をつく。

「た、助かったああああ!!」

ひとまず安堵。

思わず頭に手を乗せた時だ。

「ん、血？」

傷は浅く、擦り傷程度のものだ。

どうやらたった今、カサブタになっている箇所を引っかいてしまったらしい。

手に血が付く。

「え、血？」

もう治りかけているが、先ほどまで頭から血が出ていたようだったが、『グランドワールド』にリアルな赤い出血の演出など無い。

しかしその傷に心当たりがあるとするなら、それは戦闘開始の序盤で虎に思いつきり殴られた時しかない。

「ってことはまさかこっつて……」

嫌な予感はしていた。

が、もう否定できる材料が彼の頭には見つからない。

「現実世界なのか………？」

仮面の下、彼は呆然とつぶやいた。

が、しかし

「と、とりあえず、考えるのはよそう……これ以上は頭がおかしくなりそうだ」

パンクしそうになる頭をかかえ、ひとまず彼は目の前のことから解決することにする。

思考停止は、効果的な現実逃避の手段だ。

「ていうかなんでカサブタ程度なんだ？前に殴られた時はHPの半

分を持っていかれたぞ」

前に、とはもちろん彼がゲームとしてプレイしていたときだ。

冷静に考えて、カンストした彼のHPを一撃で半分持って行く敵の攻撃だ、カサブタが出来る程度で済むのはおかしい。

「いやまあ、とりあえずアイテムドロップ探しだけど、嫌だなあ……」

もうこちらが現実世界なのは疑いようも無いだろう。

虎の首から見えるピンクの肉とその臭いは、いくらなんでもリアルだなあだけでは片付けられない。

言いつつ、討伐したレッドタイガーをせっせと回収していく。死体は中々にグロテスクだ。

その死体が丸ごと彼のロングコートのポケットに吸い込まれていく光景は、さらに気持ち悪い。

「しかし俺のアイテムボックスがレッドタイガーでいっぱいだし……血とか大丈夫かなこれ？」

ウィンドウでボックスの容量を確認中。

虎の死体を半分ほど回収して、ふと大事なことに気づいたようだ。

この魔法のボックスが血だらけになるなんてことは無い、と信じた
いが……。

「よ、よし。とりあえずもうやめよう。とっとと前進だ。」

思考停止は、素晴らしい現実逃避の手段だ。

「またモンスターか……。もう嫌だ」

ヴァルハラへの道を進む。

ため息を吐きながら、目の前のモンスターを一刀両断する。

「母よ……。どうかPCは中身を見ずにそのまま捨ててください……
……ってまたモンスターかよ」

「エルセエ……。お前の美しい鱗をナデナデしたいよ……。また
モンスターか」

「しかし固有能力が『察知』で助かった。コレないと絶対に迷って
たよ。またモンスターか」

おそらく、先ほどのレッドタイガーが中ボスのような存在だったの
だろうか。

現れるモンスターは弱く、皆一太刀で殺されていく。

「あ、そうだ。『察知』の範囲に生物も表示させないと」

まったく、縛りプレイなんてするんじゃないかった。

呆れたように額に手を当て、首を振り、ヤレヤレと呟く。

「よし、もうゴールだな」

目標の宮殿を発見し、紳士は一気に走り出した。

第2話 初戦闘に勝利する条件（後書き）

お気に入り登録してくれた皆さんありがとうございます

第3話 追手の存在（前書き）

更新早い人って凄いなあと身に染みて実感しますね。

第3話 追手の存在

その一方。

10人ほどで結成された冒険者のグループが森の中を歩いていた。

彼らは全員疲労の色を濃くし、その姿はここまでの道のりの過酷さを容易に想像させた。

素人が見ても、一目でベテランと分かるその集団は、目の前の光景を信じられないでいた。

「なんだこりゃ……………」

呟いたのはこのパーティのリーダーであるモーガン。

茶色の短髪、2メートルはあるだろう巨体に、戦闘に特化したかのような肉付きの男だ。

一目で高級と分かる鉄の鎧に剣という格好だ、やけに堂に入っている。

冒険者家業この道15年、Sランク冒険者の彼も目の前の光景は初めてだった。

「レッドタイガー、それも何体いるんだよこれ」

仲間の冒険者も驚愕で目を見開いている。

目の前に広がるのはレッドタイガーの死体。それも大量の。

自分たちを百戦錬磨の一流と信じている彼らだが、恐らく目の前の光景を真似することは出来ないだろう。

仮にこちらの冒険者がこれだけの戦闘を行うとなると、必ず死傷者が出るだろう。

正直何人死ぬか分からない。

「

モンスター同士の争いか？」

この中で最も経験の浅い冒険者が、可能性のあるだろう解答を口にするが、

「いや違うな」

モーガンが否定する。

「おいお前ら、これ見てみる。靴跡だ」

モーガンが指を差した先には確かに靴の跡。しかしおかしい。

冒険者たちの目には『思いっきり踏み込んだ勢いで地面が抉れた靴跡』にしか見えない。

「そしてその先には、あいつの死体だ」

靴跡の延長線上にはレッドタイガーの死体。

「それに、不自然な血の塊がいくつもあるが、そこに死体は無い。周りにモンスターの気配も無い。つまり何匹か持って行ったんだ。これは人の仕業ってことになる」

あの巨体をどう運んだのかは非常に気になるが。

「身体強化の魔術ですかね？」

別の冒険者が言うが、

「いや違うね」

レッドタイガーの死体を調べていた少女が、傷口を触りながら否定する。

今年で16歳となる彼女は、成人したばかりだ。

しかし鎧の上からも分かる豊満な胸と、赤毛の短髪は発展途上を感じさせず、どこか大人の雰囲気をかもし出している。

腰に刀を差して、分厚い鎧に身を包んでいた。

「魔力は感じられない。つまりこれは生身でやったものだ」

うおお！？マジかよっどんなバケモンなんだよそいつは！

ドヨドヨと驚きの声上がる。

「少なくとも竜人族とかだろうな……。人族だったらバケモノだ」

モーガンが困り顔で言う。しかし彼の経験上、竜人でもここまでの

戦闘を行えるものがあるとも思えないが。

「しかもこれは単独でやったんだろう……。全部似たような刀傷だ」

ベテランの冒険者のモーガンは、傷口を見るだけで相手がどのような人間かおおまかに判断できる。

これは単独で行動する人間により行われたものだ。確信できる。なぜなら傷口にこだわり、では誤解があるが……。斬ることを追求した美学のようなものが見える。

モーガンは血が騒ぐのと同時に恐怖を感じた。

会いたい。会って話してみたい。同じ刀を扱うものとして。

これをやった人物はどんな者なんだ。

その反面。。

これほどの技量を持つ者、モーガンの中では限られた人物しか知らない。

しかしその中に刀を使うものは居なかったはずだ。

ならばこれを行った者の確認をする必要がある。

国に仕える騎士ではないが、脅威となりそうな者ならばギルドに報告しなければならぬ。

しかし、ここから先を全員で進んで自分たちは生き残れるのだろうか？

これをやる相手だ、生き残れる可能性は限りなく低い。ただでさえ、ここに来るまでが大変だったのだ。

悩んだ末、彼は決断する。

「お前ら、依頼は破棄だ。森の外で待っている」

周りの冒険者たちは一斉に目を見開いた。

「は、はああああ!？」

「ど、どうしたんですかモーガンさん!！」

「達成金を貰えなかつたんじゃ赤字つすよ!！」

Sランクの男の決断に周りの冒険者たちは驚く。

モーガンを筆頭とする彼らのパーティ『ストライカー』は、依頼達成率100%、周りの冒険者たちから無理だとバカにされるような依頼でも一人も欠かすことなく生還し、依頼を達成してきた。

冒険者ギルドのみならず、プライドの高い王国騎士団ロイヤルナイツからすら、生ける伝説と称されたストライカーが

依頼の破棄を決断したのだ。

「黙れ。このレッドタイガーの群れをしてみると、俺たちが生還出来るという保障は無い」

依頼の内容は森、そして宮殿の調査をし、マップを更新することだ。

しかし宮殿はさらに先。これ以上進み、生きて帰れるという保証は無い。

「それに、このレッドタイガーを3匹でも持ち帰れば、当面の金は十分にまかなえる」

部下の冒険者たちは唇を紡ぐ。

彼らとて怒鳴られる前から分かっている。しかし悔しいのだ。

依頼達成率100%の神話が崩れる。300年ぶりの記録を覆そうとしていた、最強の冒険者集団ストライカーの神話が。

自分たち新人を連れてきた、ただそれだけの理由で。

「さっさとしろ。血の臭いに釣られたモンスターの気配がないのは不気味だが、近くに隠れているかもしれん」

「モーガンさんはどうするんで？」

先ほどの森の外で待っている、とはどういうことだろう。

「俺は、これをやった者を確認しようと思う」

「うへえ！？なに考えてるんすか！」

死にますよ！と言わんばかりの驚き方だ。

「しょうがないだろう、これを一人でやるような奴だ。姿を見て、

冒険者ギルドに報告するべきだ」

でも、と若い冒険者は納得いかない様子。

「3日だ、3日外で待っている。俺が出てこなかったら置いていけ」

「いや、でも……」

「早く行け」

「でも、モーガ……」

「ささっに行け！この愚図が！」

渋る部下を怒鳴りつける。

会話を聞いていた周りの冒険者も、モーガンを連れて行くことは諦めたようだ。

「分かりました……。でも」

怒鳴りつけられた若い男は、モーガンの目を真っ直ぐ見、

「必ず生きて帰ってきてください」

それに呼応し、周りの冒険者も

「ずっと待ってますから！」

「頼みますよ！」

「3日といわず、1週間でも待ちますよ！」

部下からの信頼にモーガンは胸が熱くなるのを感じた。

「ああ、分かったよ。それとレッドタイガーの死体には消臭と防腐の魔法を忘れるなよ」

ピオーネの部下たちは、レッドタイガーの死体を回収。来た道を引き返していった。

が、そういえば何か忘れていている気がする。部下を見送り、振り返った。すぐそこ。

「……………」

赤いの短髪の少女が生暖かい目でこちらを見ていた。

「……………おい、なんで残ってるんだ」

「いいでしょ別に」

「よくない、もしお前に何かあったらピアンカへの申し訳が立たん」

彼女こそモーガンの妻の忘れ形見、何かあつてはあの世でパイルドライダーされてしまう。

「フィネ」

「嫌」

「フィネ」

「嫌だつて」

「FINE、頼むから……………」

「さあ行くよ！しゅっぱーっ！」

強情な娘だ、とモーガン。

本来なら怒らなければならないのだが、娘を怒るなんてモーガンには出来ない。

それに、これほどの技量を持つ者、戦いに身を置くものとして見ないわけにはいかない。

娘の気持ちはよく分かるのだ。

先を進む娘に慌てて付いて行く。

「あいつら、大丈夫かな？」

FINEが心配したように言う。

「大丈夫だろう、やつらもストライカーの中じゃ新人だが、冒険者の中じゃ一流だ」

しかし、と頭を搔く。

「誰だ難易度Aランクなんて言ったやつは。SSでも怪しいぞ」

オークの森を抜け、猛毒の沼を超え、灼熱の砂漠を抜けた。

それも新人に遠征の経験を積ませるといふ目的だったからこそ、ここまで我慢して来たのだ。

ここに来るまでも様々な困難があったが、この森は特別だ。

ましてやレッドタイガーの居る森など新人を連れてくるはずがない。

これは間違いなく冒険者ギルドの怠慢だ。

帰ったら文句を言つてやると胸に誓う。

「新人の経験を積ませるためにと、あいつらを連れてきたのは間違
いだったな・・・」

ばやく。

「レッドタイガーやワイバーンの居る森なんて知ってりゃ断つてい
たのにな」

今更考えても仕方無いことなのだが、言わざるを得ない。

「依頼達成率100%に拘っていたのは俺だったか・・・」

言わないとストレスで死にそうになる。

あーでもないこーでもないといい、5分ほど歩いたときだった。

「早く、会いたい」

ピクツと、モーガンの顔つきが変わった。

「これほどの技量、会って戦ってみたい」

好奇心に満ちた顔でワクワクしていた。

まるで遠方の恋人に会いに行くかのような表情だ。

「ああ、俺もだ」

父親も楽しそうだ。

「しかし、戦うよりギルドへの報告が大事だからな」

引き締まった顔でモーガンは言う。

会ってみたいのというのも本音だが、それ以上にこれほど技量を持つ者だ。

どこかの組織の人間か、はたまた所属なしの人間か、

所属なしならば、どんな人物像が確認しなければ、将来脅威となる可能性もある。

「ここだな、多分さっきの奴が通ってる」

本来道などないはずなのに、道が出来ている。

木々は倒れ、その脇には大量のモンスターの死体。

おそらく人が1人通っただけなのに、舗装されたかのようにキレイな道が出来ている。

父娘は周りへの警戒を怠っていないが、恐らく襲われることはないだろうと予想する。

「なぜモンスターが出ないのか分かったぜ」

「私もだ」

父娘は確信する。

モンスターが襲ってこないのは、ここを通った人物を恐れているからだ。

そんな恐ろしい奴は、FINEを含めたSSランクホルダーの連中にもいない。

「おい、もしヤバかったら、転送魔法な」

「もう準備してある」

ニヤリと。

バトルジャンキーの父娘はさらに進む。未知の世界へ。

第3話 追手の存在（後書き）

ヒロインの登場までに10話くらい使いそうな気がしてきました。

第4話 ソロの条件（前書き）

す、ストックが切れてきた……………。

第4話 ソロの条件

森を抜けた先には、巨大な宮殿が広がっていた。

そこだけ森が拓けていて、巨大な金の門に囲われている。

その森には不釣り合いな存在に、なんともいえない違和感がある。

ベルサイユ宮殿をモチーフにしたらしいそれは、とてつもなくデカイ。

公式設定では、確か本物の3倍の大きさと面積だとか。

「モンスターリペールか……まあ、俺に関係は無いが」

「ギヤーツ！」

男は進む。

金で出来た門を抜け、トテトテと1人と1匹は敷地内に入って行く。200メートルほど歩いたところで、休憩できそうな場所が見えた。

「よし、ここがヴァルハラか」

「ギヤーツ！ギヤーツ！」

ストライプのスーツに黒いネクタイ、ロングコートに仮面といった怪しい男は感慨深そうに言った。

男の黒髪には汗が滴っている。

男がいる場所は宮殿の大庭園だ。十字路の道は大理石のように磨かれ、鈍く光り輝いている。

さらにその真ん中には巨大な白い噴水。清らかな水が惜しみなく溢れ出ている。

あたりには美しい花々が咲き誇り、幻想的な雰囲気漂う場所だ。

さらに先に進むと階段があり、宮殿へと進む道となっている。

「とりあえずここで休憩だな」

「ギヤーツ！ギヤーツ！」

噴水の横のベンチに腰掛ける。

「長かったぜ……。まさかデーモンウィップとは」

「ギヤーツ！ギヤーツ！」

先ほどの門の前で行われた戦闘を思い出す。

デーモンウィップは全身紫の毛むくじやらかな小柄のモンスターだ。

羽があり、空を飛びまわりながら魔法攻撃を繰り返す。

そのトリッキーな戦闘スタイルから、ある意味デーモンウィップはレッドタイガーに続く強敵とも言われている。

魔法攻撃が主体のため、近接格闘スタイルの紳士には相性が悪かった。

10種類を超える状態異常魔法と、考えられる限り全ての属性魔法攻撃を繰り出された。

状態異常の回復のため結構MPを消費したが、今後の生活のための良い経験になったとしよう。

「ギヤーツ！ギヤーツ！」

そして、ベンチの横には、拘束魔法『バインド』で亀甲縛りをされた1匹のデーモンウィップ。

桜色に輝く光に亀甲縛りされるデーモンウィップの心象はいかがなものか。

1匹だけ生き残ったのでせっかくだし何かに使えるかなと、男はここまで引きずってきた。

魔力の源となる尻尾は切断したので、厄介な魔法は使えない。

「なんだうるさいぞ、俺のおかげで中に入れたのに」

その言葉の表すことは簡単だ。

宮殿を囲むように、モンスターリペールが発動していた。

モンスターリペールの結界内には、通常は人しか入れない。しかし、人の体に触れていればモンスターでも入れるのだ。使役獣を使う人への配慮らしい。

「ギヤーツ！ギヤーツ！」

「そついやこいつってゲテモノ料理で出てたよな？つまり食えるのか」

「ギヤーツ！ギヤツ、ギヤギヤツ！？」

紳士が取り出した塩コシヨウと包丁がキラリと光る。

「ギヤーギヤーギヤー！！」

暴れるが、完全に上から押さえつけられている。

「さあ昼食だ！」

彼の包丁が今まさにデーモンウィップの首を切断しようとしたその時だった。

「いや、それは困るね」

突如、若い男性の声が聞こえた。

「外とはいえ、宮殿の敷地内だ。血は勘弁してもらいたい」

「うお！？」

「ギヤアアアアア！」

なんの魔法か、紳士の目の前で砂になるようにデーモンウィップが消えて行く。

「急に現れるなよ、ビックリしたぜ」

砂になったデーモンウィップを置き、そのまま紳士はおおげさに言いながら、立ち上がった。

目の前に居るのはリザードマンだ。全身橙色で顔はトカゲだが、こちらは黒いスーツに黒い革靴だ。

噴水の横に腰掛けていた。

「このダンジョンのボスはお前かな？生かして倒すのは面倒だから降参してくれ」

紳士が言い、大太刀を抜く。

多人数での攻略を前提としたオンラインゲームのボス相手に、一人とは思えないほどの強気な発言だ。

もちろん、その自信に裏づけする何かもちゃんと隠し持っているが。

「やれやれ、いきなり武装とは。魔力を全く感じないのに、その大口は関心するよ」

それに合わせてリザードマンも立ち上がり、背中から2本の斧を取り出す。

対峙するとリザードマンの巨漢がよくわかる。180センチの紳士がまるで子供のようだ。

恐らく、このリザードマンは3メートルを超えているだろう。

「出来れば話し合いで解決したかったがな」

リザードマンが言う。

本来は温和な性格のようだ。

「戦いでしか分からないこともあるだろ？」

紳士が仮面の下で不敵に笑った。

両者が動いた。

「るおおおおお!!」

リザードマンは圧倒的な速度で迫り、右の斧を紳士のわき腹目掛けて振る。

紳士はそれを大太刀で防ぐ。が、左がガラ空きとなった。

リザードマンはガラ空きの左へと、もう片方の斧で追撃する。決まった!とリザードマンは半ば確信するが。

「ちいつ！」

舌打ちと共に紳士がリザードマンの腹を蹴り飛ばす。

「ぐお！？」

完全に後手に回っていたはずの紳士の蹴りは、あまりに速すぎた。

「がはあ！……」

リザードマンは受身を取ることも出来ず、遙か後方に飛ばされて宮殿の階段へと叩きつけられる。

（くそっ、なんだこいつは！）

リザードマンは驚愕する。

飛ばされたのは、距離にして30メートルと言ったところ。隙を作らない様に、素早く体勢を立て直す。

魔力などまったく感じない、弱いはずの人間だと考えていた、そんな数分前の自分を殴ってやりたい気分だ。

しかし、それでも油断だけはしていなかったはずなのに……。

（振り出しか……。見たところ奴は近接戦闘がスタイルだ。それならこちらに分が……。）

そこまで考えた瞬間、リザードマンの視界がブレる。

「なにつ!?!」

リザードマンが頭を蹴られた、と気づいたのはレンガに叩きつけられてからだった。

紳士のスキルの3つの内の1つ、肉体強化。

もちろん魔法でも出来るが、こちらには発動までのタイムラグがない。

追撃は終わらない。

いつの間にか大太刀を鞘に戻していた紳士は、

床に倒れたリザードマンの腹に体重を乗せた肘打ちを入れる。

「ぐほお!?!」

僅か数秒の攻防は、リザードマンの気絶により、あっけなく勝負が付いた。

数分後　。

「うーん、リザードマンは倒したがサンクチュアリが解除されていない。どういうことだ?」

いつものような、天からパリーンとガラスが落ちてくるような演出

がない。

不可視の魔法なので、そもそも“こちら”に存在しているかもわからない

もうゲームの世界でないのは確かだが、無闇にドラゴンをここまで呼んでサンクチュアリに撃墜されるような光景は見たくない。

もったも、ドラゴンが来るかは怪しいが……。

しかし、ここは宮殿のボスであるリザードマンに訊いたほうが良いだろう。

少なくとも今の彼よりは知識が有るはずだ。

そう紳士の考えが纏まりつつあった時だった。

パチリ

リザードマンが目を覚ました。新調したばかりのスーツは無残に汚れている。

「生きて、いる……………?」

まず彼が感じたのは、その疑問だった。

続いて、リザードマンは先ほどまでの記憶を思い返す。

「そうか、負けたか……………」

眩く。

この宮殿を守り300年ほど、負けたことなどなかった。

この森のモンスターを全て倒した自分に、勝てるものなど今まで一度もいなかったのに。

それどころか最も自信のあった近接戦闘で、仮面の男の動きを見ることすら出来なかった。

「ままならんものだ……」

リザードマンは思い返す。圧倒的実力差による敗北などいつ振りだろう。

リザードマンの視界がボヤけた。

「あー、自分の世界に入っているとこ悪いが、いくつか訊きたいことがある」

そう言った横には、先ほどリザードマンを負かせた男が胡坐を掻いていた。

しかし、男が横に居たのには気づいていたのに、なぜ自分はあるに恥ずかしい回想をしたのか。

リザードマンは顔が熱くなるのを感じた。

「まず、ここはヴァルハラで間違いないな？」

ヴァルハラ。

リザードマンの長い生涯の中で、その単語を聞いたのはいつ振りだろうか。

「もちろんだ……。そうだ、ここがヴァルハラだ」

ヴァルハラ、そう呼ばれたのはいつ振りだろう。

自分以外にその名を覚えている人がいたとは、リザードマンは嬉しさに涙を堪えることが出来ない。

また視界が歪む。今日の彼は泣きっぱなしだ。

「お、おい？なに泣いてんだ！？腹に決めたやつが痛むのか！？」

先ほどの冷静さとはうってかわり、紳士はオロオロとします。

「いや、大丈夫だ。それよりも質問に答えてやる」

「そ、そうか？そんじゃ、続けるぞ。ここはもうクリアしたと思うんだが、サクチュアリが解除されていない。これってお前の手動なのか？」

質問には懐かしい単語がいくつも浮かび、リザードマンは再び泣い

た。

「……………うん、大体訊きたいことも終わったよ」

宮殿の中を見学させてもらい、中々満足そうな紳士。

質問がてら宮殿の中をリザードマンに案内してもらっていたのだ

ちなみにサンクチュアリは300年ほど前に突如消えたらしい。

クリア後に、指定の街まで送ってくれる転送魔法陣も消滅したそう
だ。

しかし、これで心置きなくドラゴンが呼べるようになった。
来るかどうかは分からないが……………。

今は客室でこれまた豪華な椅子に座り、休憩していた。

「そうか……………これより貴公はどうする？」

紳士は、先ほどリザードマンから譲り受けたアイテムを手で弄りな
がら、言う。

「そうだな、家に寄ってみようと思う。もう随分ほったらかしだか

ら

どうやら紳士が今いる世界は300年後の世界らしい。

質問には今は使われていない単語が多数存在し、「プレイヤーを知っているか」と訊いたら「もしや貴公は300年前の人間か」と言われてしまった。

にわかには信じがたい話だが、プレイヤーという存在は300年前に突如として姿を消したらしい。

異世界に来たとは納得したが、まさか300年後とは……。紳士には少し信じられない。

ひとまず、自分はプレイヤーだったが、時空間魔法の実験で未来へ飛ばされた。

ということでは話を落ち着け、質問を再開。

現在の世界情勢や一般常識まで教えられた。

内容を聞くと、科学技術の発展は未だに無いらしい。

魔法に至っては完全な停滞、下手をすると後退しているらしい。

なぜそんなことを森に住むお前が知っているんだと訊いたら「城下町の魚が安くておいしいんだ」だそうだ。

まだまだ差別も強い亜人種。変化の魔法で人に姿を変えて、よく人里に降りているらしい。

世知辛い世の中だ。

「そうか。早く行ってやるといいな・・・」

それにしてもこのリザードマン、もう自分がなぜこの土地を守っているのかも分からないそうだ。

天からの声で、ここに侵入したものは撃退せよという命令をずっと守り続けていたらしい。

もっとも、暴力だけでなく出て行くように説得もしていたそうだが。

「ところで、そのアイテムは一体何に使うのだ？」

リザードマンが尋ねる。

「ん、ああ。口では説明しにくいかな」

紳士の手には3つの六角形のガラス体。

効果はエクストラスキルの能力強化。

元々は、ダンジョンの攻略報酬アイテムだったものだ。

紳士の記憶が確かなら、リザードマンは圧倒的戦闘力の代わりに、大半の魔法とスキルが使えず、さらにエクストラスキルがない。

そもそもエクストラスキルという言葉そのものが消えているようだ、言っても分からないだろう。

このヴァルハラを除けば、数多あるダンジョンでも4つの箇所しか手に入らない。

今、手で弄っているのは、そういうアイテムだ。

本来、これは紳士、ローション、スラッパの3人で山分けするはずの物だった。

しかし、仲間はどうもない。
もう会えるかどうかすら分からない。

「まだ全部信じたわけじゃないけど、未練は捨てる。これは俺が全部使いますよ」

その言葉は誰に向けたものだったか。

紳士は3つのガラス体を握り、砕いた。

「なっ!？」

リザードマンは驚く。

砕いたガラス体から眩い白い魔力の波が溢れ、紳士の体に集まって行く。

その光景は、まるで御伽噺の天使の登場シーンのようだ。

「ふう、完了だな」

光の奔流を体に閉じ込め、紳士はウィンドウを開く。

他人には見えないので、リザードマンには何をしているか分からない。

このことは既に検証済みだ。

「エクストラスキル、無事にレベルは5になっているな」

ガラス体1つにつきレベルは1上がる。

ガラス体を3つ消費したことにより、元々2だった彼のレベルは一気に5となった。

これで、基本ステータスに続き、彼のエクストラスキルも無事に力INSTとなった。

「い、今のは一体・・・？」

「ちょっとした強化魔法さ」

驚くりザードマンの質問に、紳士は笑って答えた。

第4話 ソロの条件（後書き）

ちなみに紳士は名前じゃないです。
そのうち変わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7141z/>

別の世界で生きていく条件

2011年12月29日16時51分発行